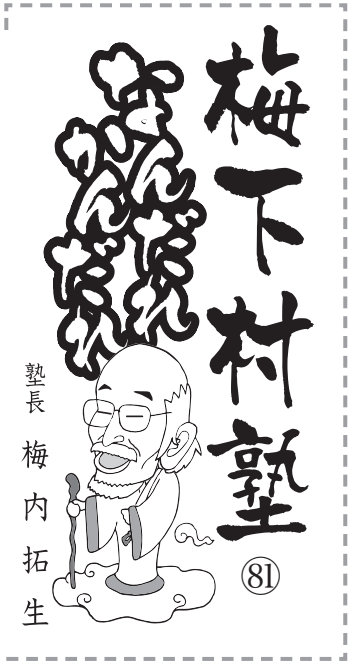
「森と水と命の惑星」国際会議

～地域と世界の心と魂を詠む～



気仙地方文化と21世紀文明(3)

（見える汚染と見えない汚染）

文明の興亡と砂漠化は関係が深いものが多い。説明のひとつが熱エネルギー源としての森林の伐採によるものである。20世紀半ば頃から中国では砂漠化が問題になってきた。人口増加と共産党政府による生産拡大活動とに関係すると考えられている。中国から九州や本州西部に飛来する黄砂の問題はこの頃から関心をよんでいた。

この問題の状況は次第に深刻さをましてきており、これに加え、最近では2・5M微粒子の飛来による問題が大きな関心を呼んでいる。2・5M微粒子による汚染は目に見えにくいだけ、最近になるまで健康被害への関心が低かった。21世紀には、目に見える問題と見えにくい問題の両方に対処しなければならないので、気持ちをしっかりと引き締めなければならない。

目に見えない放射能汚染は、健康に深刻な影響を及ぼすが、放射能計測器の普及により、社会対応のための一つの方法は目処がついている。しかし、除染土壌の保管と廃棄、使用した核燃料の最終処理と保管の問題の目処はついていない。

目に見えにくいものの始末は手に負いにくい。健康と病気の関係においても、病気になって治療することも対処の一つであるが、予防に力を注げば、より大きな効果が期待できる。

政治、経済、文化、これらを「もの」のレベルで捉えられる限りでは、手の打ちようもいろいろ考えられるが、「心」のレベルになると手の打ちようが難しくなる。これを「文化汚染」と呼ぶこともあるが、何を以て汚染とするのかは、立場、立場によって異なって来る。

（気仙地方の地理と文化）

大船渡市博物館には日本列島と気仙地方の地殻隆起運動の模型があり、気仙地方の地殻は約4億年前に隆起した日本最古のものであるという説明を聞いた。

三陸沖には親潮と黒潮が交流し、豊富な漁場となっている。歴史文化的視点にたっても、数万年年前から南北の両方から人々が移動してきて、住みついていたことが知られている。文化が交流する場でもあったとも考えられる。

この地理と文化の運動の脈流が現代のケセン文化の魂と心にどのように受け継がれているかを掘り起こすことを、気仙地方の震災復興のために考えることは極めて大切であると思う。

自由とは無規律をいうするものではない。自由と規律、自由と拘束、歴史と現実、有情と無情、不易と流行、情と理、など古今東西の言葉を視野に入れるなら、気仙地方の歴史的多種多様な文化の混淆性に視点を合わせると、21世紀文明へ梅下村塾㊴に記述してある「新しい公共」を育てる地域モデルを提示できるとの考えている。

世界の政治や経済は生き残りのための国同士の厳しい競争にさらされていると同時にお互いの損得が複雑に絡み合っている。円高、円安で、損する国と人があり、イタリアの財政危機状態はスペインに飛び火をし、世界の経済に問題を及ぼす危険性が高い。まさに、「北京で蝶が羽ばたけばニューヨークで嵐が生ずる」という言葉の通りに世界は入り組んだ関係性の網目の中にある。

仏教の教えにある因縁の世界である。気仙地方の文化の奥にある、「おもいやりの心」と「新しい公共」のつながりの「妙」の創造と世界への発信が期待される。

（東海新報記事から）

日銀の白川総裁への批判記事が2月22日の産経新聞の経済が告げる（「白川日銀」莫大な負の遺産　田村秀男）として掲載されている。

3月1日にの産経新聞は「人界観望楼　MITシニアフェロー　TPP交渉参加は恐くない　岡本幸夫」が掲載されている。この記事は、複雑に絡み合っている世界の経済と政治の中で国が生き抜くためには柔軟な思考のもとに政策と戦略を考えなければならないと主張している。まさにその通りであると思う。

2月26日の東海新報の世迷言では、気仙を避暑地として「海の軽井沢」として胸を張って威張れると述べている。

この考えをさらに推し進めると、海の軽井沢、陸の軽井沢を越えて、「世界のオアシス～自然と文化の避暑の里～」として世界の人々との交流の場としてはどうかと考えている。